

(二)加賀の安國寺―加賀に於いてはその安國寺を安國山崇聖禪寺と呼んだことは明らかであり、東福寺不二庵開基岐陽方秀の撰んだ不二遺稿によつて、應永九年無學絕學が將軍足利義滿の命によつて崇聖寺何世かの住職に補せられたことも知られる。隆涼軒日録によると、その後寛正三年六月八日に、濃美河(直海川)と白山河との合流地點にあつた安國寺が、河岸の崩壊によつて危険に瀕した爲、修繕を命ぜられたことがあるので、その位置が石川郡直海川の河口附近であつたことが想像せられ、文明十六年の頃に至るまでその記事が散見してゐる。

(三)能登の安國寺―能登の安國寺に就いても、それを萬松山安國禪寺と稱し、清拙大鑑國師を開山としたことは扶桑五山記に見え、隆涼軒日録嘉吉元年四月十四日に能州安國寺清孫首座、寛正三年六月三日に能登國安國寺昌才首座などの名も見える。又寺の所在が舊七尾であつたことは、東福寺彭叔の猶如昨夢に載せる獨樂亭記によつて知られる。

(四)安國寺と宗門―安國寺及び利生塔の建立は、その初め疎石の勸誘から起つた。故に之に選定せられた伽藍は悉く禪宗ではあるが、しかし疎石の宗門である臨濟禪とのみは限らぬ。蓋し萬松山安國寺の如きは、清拙大鑑の開創だといふから、固より臨濟禪であるが、能登の利生塔である永光寺が曹洞禪なるを以て見れば、洞濟何れでも構はなかつたやうである。

(五)越登賀三州志の脱―越登賀三州志に、『安國寺は、何國に在りても東福寺の下派なりといふ。相傳ふ。應永二年勅願に依りて、日本

一箇國に安國寺一寺あて創建あり。此時加州には傳燈護國禪寺、越中には國泰萬年禪寺、能州には總持護國禪寺あれば、此三州に安國寺を置くに及ばずとて止むといふ。』とあるのは、國泰寺が越中の安國寺であつたといふ説あるの外、凡べて事實を誤つてゐる。

アンゴジ 安居寺 河北郡大浦に在つて、眞宗東派に屬する。もと道場であつたが、明治十二年七月寺號公稱を許された。

アノコロモチ 餅ころ餅 石川郡成なる村山圓八の製する所であるが、その地松任に接續して居るから、松任の餅ころと呼ばれる。天狗に攫はれたる始祖圓八が夢中家族に製法を傳へたものといひ、餅を小豆餅でくるんだものである。同家の庭園にある羅漢柏が、元文二年圓八の失踪前に植ゑたものといふから、餅ころ餅創始の時代も略推察せられる。

アンサンワラ 安産薬 石川郡安原に産する稻の葉を、舊時は安産薬と稱して産蔕に愛用せられた。安原の訓ヤスハラを安腹と解した爲であらう。

アンジュウジ 安住寺 金澤野田寺町に在つて、本覺山と號する。天台宗。初め慶長元年拜築法印が美濃野口に創立したが、西尾半人の前田氏に仕へるに及び従つて金澤に來り、慶長元年四月大坂役には避箭符を前田利常に献じた。後利常から河原町に寺地を賜はつたが、寛永十三年の罹災によつて今の地に移轉した。二十年東照宮を金澤城内に勧請するに及んで、安住寺はその看坊頭を命ぜられ、役料として米十石を受けた。

アンジュジ 安受寺 能美郡西二口に在つて、眞宗東派に屬する。天保二年寺號を許された。

アンシヨウイン 安祥院 富山藩主第三代前田利興の法號。詳しくは安祥院青山日高大居士。

アンジヨウジ 安成寺 羽咋郡鶴野屋に在つて、眞宗東派に屬する。

アンジヨウジ 安淨寺 鹿島郡池崎に在つて、眞宗西派に屬する。能登名跡志に、『安淨寺とて、長如庵の十六歳まで有りし一向宗あり。此寺昔は孝恩寺とて禪宗にてありし也。』といへるは、光雲寺のことを誤つたものであらう。

アンセイジ 安審寺 羽咋郡大念寺に在つて、眞宗東派に屬する。

アンセイノダイゴク 安政大獄 大聖寺藩に於いては、安政五年十二月十八日幕府から水戸藩士京都留守府役鶴岡吉左衛門、京都儒醫池内大學、京都儒師浮田一憲、同人伴浮田松庵四人を預けられ、藩は之を江戸邸に置いた。こは皆所謂戊午の獄の連累と見做されたもので、そのうち鶴岡吉左衛門は、翌年九月二十七日藩より幕府に引渡された後に死刑となり、池内大學は同日中追放に處せられたが、文久三年正月十二日大坂に於いて土佐浪人岡田以藏等に殺され、又浮田一憲と松庵とは同年十月七日所拂に處せられたが、留置中に病を得て、幾くもなく歿した。

アンセンジ 安専寺 羽咋郡杉野屋に在つて、眞宗西派に屬する。

アンセンジ 安泉寺 羽咋郡古江に在つて、眞宗東派に屬する。

アンダイハラ 安代原 鳳至郡楠比庄に屬する部落。

アンダイハラライシ 安代原石 鳳至郡安代原に産する石材。輝石安山岩で黝色を呈し、安山岩質石基中に、白色斜長石の分解したものと及び黑色輝石を散在せしめる。硬さは凝灰岩に同じい。

アンダイハラジヨウ 安代原城 ↓アサフダジヨウ 淺生田城。

アンドウシユクメイ 安藤叔明 珠洲郡小路の人。父は平左衛門。文化四年二月十五日生まれ、通稱兵衛、諱は襲、字は千丈、後叔明、路亭と號した。京都に赴いて、藩を岡本豊彦に、詩書を頼山陽・梅辻春樵に學んだが、歸郷の後天保十三年十月九日三十五歳を以て歿した。その墓誌は春樵の記する所である。

アンドウチヨウザエモン 安藤長左衛門 大坂兩役に従軍し、鐵炮組の足輕頭であつた。萬治元年の土籬小松衆の内には千五百石安藤長左衛門としてゐる。長左衛門の歿したのは寛文五年十一月十二日であつた。子長兵衛の時浪人となつて江戸に往き、後旗本に召抱へられた。

アンドウマチ 安藤町 金澤の町名で、俗にアンドン町と呼ぶ。大音氏下屋敷の隣地で、石引町から東北の小路である。此の地は從來鐵炮組足輕の組地で、その頭安藤長左衛門から起つた名であるといふ。

アンニヤモドリ 行脚戻 一冊。伊勢の俳人五桐編。元祿十六年京井簡屋庄兵衛板。五桐がその師涼菟の加越行脚の歸郷を迎へて成した歌仙と、加越等の俳人の作句を載せたものである。

アンニユウジ 安入寺 羽咋郡長田に在つて、眞宗東派に屬する。